



# 男は 痛い !

國友万裕

第2回

象の背中

## 1. 男たちのジェンダー依存

大学の頃だ。飲み会で、他の大学生たちと話した時に、結婚の話になった。その時、京大3回生のある男子学生がこういうのだ。

「ぼくは、結婚したら奥さんには働いてほしくないんや。給料が安くても、安い中でやりくりして欲しい。『俺が食わせてやっているんだ』という気持ちを持っていたいからね」

立命大の5回生は、大学を出たら、故郷の北陸に帰って、お父さんの仕事を継ぐことになっていて、「俺は、大和撫子が好きだからね。だから働いて欲しくないし、俺が稼ぐから、テニスいったり、料理したりして、過ごして欲しい」

ぼくは、話を聞きながら、「男って、健気だなあ」と感心してしまった。ぼくは当時からジェンダーに囚われていたので、男が女子供を扶養しなくてはならないという考えには反発していた。しかし、彼らの前で、そのことを口にするにはできない。「俺は、やっぱり男じゃないんだなあ。オカマなんだ」と思って、悩んだものだ。時は、華の80年代。今みたいな就職難でもないし、皆、楽天的だったということもあるのだろうが、ぼくはそういう考えには絶対になれなかった。というか、そういう考えができる男に憧れながら、同時にそういう考えに激しく抵抗するアンヴィバレンスを抱え込んでいたのだ。

結局、ぼくは、その抵抗をずっと持ちこしてしまい、結婚どころか、ほとんど女っ気のない、かといってゲイになるわけでもない、性的不能者のような人生を歩んできた。

社会はその間に変わって行った。バブルがはじけ、不況が長引いて、先行き不透明な世

の中になり、女性が仕事をしなければ、やっていられない家庭が今では大半だろう。とはいうものの、今でも男たちの男性ジェンダー依存（男らしさを演じる自分に依存すること）は終わってはいない。

ぼくが社会運動で出会ったある30代の女性は、若くして結婚して、子供が2人。夫さんは仕事を真面目に頑張っているのだが、それでも生活は苦しい。「じゃあ、私が働くから」と彼女がいうと、「俺は女には働かせたくないんだ」と言われるのだそうだ。「でも、頑張ってはるからね」と彼女ももうそれ以上夫を咎めならしい。

また、同じところで知り合ったある40前の女性は離婚経験あり。女手一つで子供を2人育てている。別れるまでは大変だったらしい。「私がどれだけ、彼の身体をゆすぶって、彼の心を聞き出そうとしても無駄なのよ。女を殴ったり、荒っぽく扱ったりしちゃいけないだと思っはるから、私がどれだけ酷いことをしても、反応してくれないし……」と彼女は訴えていた。彼女は殴ってくれるくらいの男のほうがよかったのだろうか。

もう一人、50くらいのフェミニスト女性とも会ったのだが、彼女は多少の内職はしているもののほとんど専業主婦。夜は原則として外出禁止だと言っていた。旦那は学校の先生なのだが、家に帰ったときくらいは、良い奥さんでいて欲しいらしい。3人子供がいるのだが、もう皆、大学生くらいの年になっているみたいだし、夜出歩いても問題はないようにも思うのだけど……。やはり、女は家にいるものと思っているのか。「男は大変だからね」と彼女は、フェミニストでありながら、

そういう夫を受け入れている。

男たちのジェンダー依存。皆、つらいくせに、「俺は男だから」と虚勢をはって、頑張っている。女子供を養ってやっている。女に暴力は振るわない。ぼくには、こういう考えは理解できない。女性が働いてくれるんだったら、生活は楽になる。夜、家にいるから、良い奥さんというものでもないだろう。むしろ、家に帰ってからまで、うるさく言われたんじゃ、自分の時間は全然なくなってしまう。逆DVされても、女は殴るべきじゃないと思っはるなんて、マゾなのかよー。俺だったら、女から殴られたりしたら、その時点で別れるけど…。

ある男性が、「幸せは、女と子供のためのものなのだ」と言っていたけど、本当にそうだなあ。昔、「酒と涙と男と女」という歌がはやったけど、ぼくはあの歌には虫唾が走る。明らかに女よりも惨めなのに、虚勢を張ろうとする男の歌だ。そして、この男は、虚勢をはるのがイコール男だと思っはる。

ぼくは、こういう考えは大嫌いだけど、その一方でこういう男になっておけば幸せだっただろうなあと思う。逆説的だけど、女子供が幸せならば、男はどうでもいいんだと虚勢をはることが男の幸せなのかもしれないのだ。ぼくは、生まれてこのかた虚勢を張ったことはほとんどない。そして、ぼくは、決して、幸せではなかった。

## 2. 男のためのメルヘン

『象の背中』（井坂聡監督・2007）はそれほど評価の高かった映画ではない。ぼくが、これを見たのは、ご最員の役所広司の主演だ

からだった。彼の主演作はほとんど見ている。特別美男子でもないけど、なんとも人間味があって、俺もこんな男になりたいなと思う。この映画でも、風呂に入る場面やベッドシーンで、役所の裸の場面があるのだが、決してシェイプアップされた美しい身体というのではなく、普通のおじさんの身体だ。そこが彼の魅力だ。

ぼくは渡辺淳一の世界が苦手だが、役所が主演した『失樂園』だけはよかった。先日亡くなった森田芳光の演出のおかげでもあるのだけど、渡辺の作品が苦手な人にも見れる映画になっていた。『失樂園』は言ってみれば、中年男性の性愛のメルヘンである。ぼくの知り合いの女性は、渡辺淳一の作品のヒロインは男がつくりだしたお人形だという。あんな女、現実にはいない。男の都合でつくられた女たちなのだ。でも、仕事に疲れた中年男がひと時のカタルシスを味わうには、それはそれでいいのだろう。映画は娯楽なのだから…。

『象の背中』も中年男性のメルヘンである。『失樂園』のようなエロティックな話は苦手なタイプの中年男性向けメルヘンとでも言うべきか。こんな作り話があるのかと思うくらい綺麗事だけど、ぼくは、役所に感情移入して、楽しい気持ちで映画を見ていた。映画は、役所が演じる主人公・藤山幸弘（これも平凡な名前だねー、笑）が、肺がんで、余命半年と宣告される所から始まる。

彼は、不動産会社の部長で、妻・美和子（今井美樹）と、息子（塩谷瞬）と娘（南沢奈央）の4人家族。東京の閑静な郊外の一戸建てで暮らしている。注目して欲しいのは、会社と

一戸建ての家の外観が、見上げるようなショットでとられていることだ。東京の大きな会社、坂を登ったところにある一戸建てのお家。この人は社会的勝ち組であり、エリートコースを歩んできた男性であることが示唆される。

この後、映画は、彼が残された半年の間に、これまでの自分の人生で意味のあった人たちに会っておこうと、初恋の女性やら、高校の時の友達やら、1人ずつ会いに行くエピソードが積み重ねられていく。

「俺だったら、誰に会うだろうなあ」と映画を見ながら思った。ぼくは、過去の人で、あまり会いたいと思う人はいない。いや、どっちみち死ぬんだったら、会って、殴ってやりたいと思う人は何人もいる。だけど、昔好きだった女性や友達ということになると、何年かたてば忘れてしまう。どれだけ好きだった人でも、自分とは関係ない人になってしまう。人間は薄情だし、愛よりも憎しみのほうを覚えているものなのではないか。

しかし、そう思うのは、ぼくが不幸な出会いにばかり満ちた少年時代を送ったからで、普通の男性にとっては、少年時代は甘酸っぱいは幸せな思い出なのかもしれない。羨ましいなあ。

#### （1）中学の時の初恋

最初に、幸弘は、中学の時に淡い恋の告白をした女性（手塚聡美）にもう一度会いに行く。戸惑いながらも、彼に優しく接してくれる彼女。

この場面だけでも、ぼくは何やら胸が痛いような、嫉妬の思いにとられる。ぼくは、中学の頃、女の子たちから激しい苛めにあっ

た。ぼくが不登校になったのは、前号でも書いたとおり、先生たちとの確執のせいもあるのだが、ぼくの自尊感情をつぶしていったのは、クラスメートの女の子たちだった。ぼくは今で言えば発達障害のような子で、女の子たちから「気持ち悪い」と言われ続けた。どういうわけか、ぼくは男の子からいじめられたという記憶はほとんどない。もっぱらぼくを嫌っていたのは女子だった。「気持ち悪い」と言われても、自分ではどこがどう気持ち悪いのかわからない。ぼくが女性全般に憎しみを抱くようになったのは、男子からは「気持ち悪い」なんて言われたこともないのに、女子からは執拗に「気持ち悪い」と言われ続けたからである。女は冷酷だ。女子から「気持ち悪い」なんて言われることが、そして白眼視されることが、男の自尊心をどれだけ傷つけるのか。中学生にもなれば、それくらいのはわりそうなものなのに……。

これを訴えると、たいていの女性は、「それは一部の女性でしょう」と反論するのだが、ぼくを苛めたのは一人や二人ではない。複数だ。ぼくが男よりも女のほうが性質が悪いと思うのは、女性の場合だと、誰か一人から嫌われると、他の女性にまでその思いが伝染して行って、共同妄想になっていくからである。女たちの団結は怖いのだ。

だけど、おそらく幸弘はそういう経験もないのだろう。

## (2) 高校時代は野球部

幸弘は、高校の時は野球部で、この映画ではかつての野球部仲間、今は酒屋のおじさんとなっている同級生（高橋克美）とキャッ

チボールしながら話をする場面が、カメラを引いて、両者を画面に収めながらかなりの長回しで描かれる。幸弘のほうレギュラーで有能なメンバーだったことも台詞で語られる。

この場面なんかは、ぼくはもう羨ましくて、心がはちきれそうになってくる。「俺も、こんなふう友達とキャッチボールを、一度でいいからやってみたかったなあ」という切ない思いがこみ上げてくるのである。

ぼくは運動神経ゼロで、キャッチボールなんて未だにできない。ぼくはつくづくスポーツが人並みにできるように生まれついていたら、こんな人生を歩むことはなかったと毎日のように思っている。高校くらいまではスポーツができるやつのほうが何かにつけて得だ。子供時代に男のヒエラルキーをつくるのは、主としてスポーツ能力である。

社会に出てしまえば、スポーツ能力は関係ないかもしれないが、ぼくは中学まで、そのことで苦しんで、結果、高校に行かれなくなってしまった。スポーツができなかったゆえに、社会に出る以前に挫折してしまっているのだ。スポーツが得意だった人には、スポーツができない男がいかにかハンデを背負わされるかはわからない。男は、スポーツで男の世界を学んでいく。チームプレイや友情、上下関係やホモエロス。それは社会のホモソーシャルイズムに相通じていて、スポーツの経験のある奴は、男同士の関係を自然な形で学んでいるので、男社会のなかを渡って行きやすい。また自分の男としてのアイデンティティも、スポーツをする中で生まれていく。

ぼくは子供の頃、スポーツの塾があればなあと思ったものだった。国語や算数だったら

苦手ならば、塾でどうにかある程度はカバーできるだろう。だけど、スポーツは、塾もないし、参考書もない、できない子に手とり足とり教えてくれる人なんて誰もいない。学校の体育教師は、ただ威圧的に怒鳴って、できない子の自尊心を傷つけるだけだ。だからこそ、できる子とできない子の差がどんどん開いて行って、ぼくのような男の子集団の落ちこぼれを生み出してしまうのだ。

でも、幸弘はおそらくスポーツも得意だったのだろう。

### (3) 息子と男同士の会話

幸弘の家族は、妻と子供が2人。しかも、子供は、息子と娘が一人ずつ。本当にバランスのとれた絵にかいたような家庭だ。

幸弘が最初に自分のがんと打ち明けるのは息子である。「お母さんたちには言わないでくれ。お前には話しておく。男同士だからな」というセリフが出てくる。男同士ねー。ぼくも父と息子の男同士の絆には憧れるけど、現実には、フロイトのエディプス・コンプレックスを引き合いに出すまでもなく、父親と息子は上手くいかないというケースのほうが多くて、ぼくも、20歳くらいの頃までは、父に反発していて、ほとんど口もきいていない。こういう心のつながり合った父子になれるなんて、羨ましいなあ。

娘も、お父さんに対して、従順で素直。彼女は、父の様子がちょっと変だということに感づいて、「何かあったの？」と聞き出そうとするのだが、幸弘ははぐらかして、教えようとしな。

妻や娘、すなわち女には自分の悩みを打ち

明けない。男同士だけで処理しよう。こういうのってカッコイイと思うけど、ぼくは、引きこもりだったから、つい最近まで、母ぐらいしか話を聞いてくれる人はいなかった。いい年をして、マザコンみただけけど、仕方がなかったのだ。

幸弘は本当に幸せな人だ。

### (4) 敬語で話す妻・ため口で話す愛人

また妻の美和子が、幸弘に対して、敬語を使うのもすごいと思う。「……だったんですね。」「私、あなたがいなかったら、どうすることもできません」等など。今時、こんな女が本当にいるのかねー。また、この2人は寝る時も、狭いシングルベッドで2人で寝ているのだが、ぼくが結婚するとしたら、妻とは別々のベッドで寝たいと思う。だって、寝る時まで一緒じゃ息詰まっちゃうし……。身体も動かせない。喧嘩しているときなんかだと、こんな状態じゃつらいだろうなあと思う。

さらに幸弘には愛人がいる。彼女は敬語ではなく、ため口で話すのだが、それでも、今時の女性としては、女性的な礼儀正しい話し方だ。彼女は彼に安らぎをあたえ、なおかつ何も要求しない天使のような愛人だ。

普通だったら、「あんた、愛人とは別れてください！」「早くに奥さんと離婚して！！」と妻と愛人が喧嘩しても可笑しくはないのだけど、この映画の場合は、奥さんも愛人も、彼のことを理解していて、お互い愛人や妻の存在を知っていながら、そのことを追求しようとしな。あくまでも幸弘の立場と感情を尊重したうえでつきあっている。

愛人と妻がホスピスで対面する場面、「ミネラル・ウォーター切らしているから、買って来るわ」と妻は席をはずす。その後、海を見つめながら、佇んでいる彼女の後姿が写される。彼女は夫の愛人が来ているのに、見ないふりをして、自らの愛を保とうとするのである。こういう女性はしばしば存在する。嘘をついてでも、愛人のことはないことにしてしまうのである。

#### (4) 泣いて馬謖 (ばしょく) を斬る

仕事の関係者とはどうか。彼は仕事で、立场上仕方がなかったとはいえ、他の小さな会社の男・高木 (笹野高史) に非情なことをしている。彼とたまたま会い、2人で食事をして語り合った後、「許してくれ」と路上で土下座して謝る幸弘。本当に男は悲しいなあ。自分の保身のためには時として、罪のない人を切り捨てざるを得ないときがくるのだ。ここで幸弘は路上で何度も蹴りつけられる。しかし、ここでも、高木は幸弘のつらさも理解したうえで、でも自分にとっては幸弘は悪い男であったがゆえに蹴るわけで、これは報復と言うよりも、贖罪の蹴りなのである。男の世界では、しばしば、「泣いて馬謖 (ばしょく) を蹴る」ことをせざるを得ないときがでてくるのである。同じ男だから、そのことも高木は理解している。

会社の上司や同僚も、2人で食事をしたり、彼の希望をとおしたり、実際の管理職の世界はもっと汚いんじゃないかと思うけど、情の部分の部分を失っていない。しばしばサラリーマンは企業戦士と言われるが、企業に勤めるサラリーマンの男同士って、戦友愛のようなもので結ばれていて、そこはかたない男同士の優

しさやホモエロスが漂ってくるのである。

#### (5) 父への反抗

幸弘は、次男だが、父に反抗して、12年間実家に帰っていない。父の命日にもずっと顔を出さず、代わりに妻の美和子が、幸弘には内緒で命日にいっていたということが、兄 (岸辺一徳) との会話の中で語られる。ここも長回しで、スイカを食べながらベンチに並んで話している2人をたっぷりと見つめていく。キャッチボールの時と同じ演出だが、違っているのは、先のキャッチボールでは、男2人が (当然のことながら) 向かい合っているのに対し、ここでは2人が同じ方向を向いて、時々、チラリチラリとお互いのほうを見るという演出になっていることである。これは2人が愛し合っているのだけでも、ちょっと気まずい関係であることを示す演出である。

ここで交わされる会話で、幸弘が、外に愛人をつくっていた父に反発していたことが明るみにでるのだが、そういう幸弘自身も父に似て、愛人をつくってしまったのである。心理学的に言えば、親と同じ脚本を生きるとでもいうべきだろうか。

愛人をつくって、親に反発しているなんて、男の身勝手だなあと思う人もいるだろうか。いや、そんなことはない。男の場合は、ちょっとぐらい不良のほうが、魅力的なものだ。最近になって小谷野敦が『昔はワルだった』と自慢するバカ』という本を出した。まだ読んでいないのだが、このタイトルだけで、小谷野さんが言わんとすることはなんとなくわ

かる。

ぼくは子供の頃、スポーツや喧嘩ができないうえに、気が小さかったため、悪ガキではなかった。しかし、悪ガキになれるやつが羨ましかった。そういうやつのほうが、先生からは怒られるが、男としての魅力はあるからだ。全然、ワルな要素のない真面目一徹なんて魅力がない。もちろん、極度のワルはそれはそれで困るが、適度に愛人と遊んで、適度な不正もして、適度に親に反抗して、しかし、家族の前ではいい夫、いい父親を貫いている幸弘はむしろ何も影のない男よりも、好いたらしい男である。

「俺、本当は怖いんだ」と兄の前で泣く幸弘。この人、考えてみると、女性たちの前では泣かないし、自分のつらい気持ちを打ち明けるのは、息子、兄、ホスピスの他の男性患者など、もっぱら男である。これまた綺麗事というか、現実には女性のほうが気持ちを受け止めてくれるので、女性相手のほうが愚痴を言いやすいようにも思うのだが、図柄から言った場合は、男の前でつらい気持ちを吐露する男のほうがかっこよく見える。女には甘えていない、余計な心配をさせていない。そういう男気を感じさせるからである。

#### (6) 煙草

幸弘は、喫煙者だ。いくつかの場面で、煙草を吸う人物であることが示唆される。彼の病気は肺がんだが、肺がんは煙草が原因になることが多いことは知られていることである。煙草は、ストレスがたまるから吸うわけで、男の人生を全うするには相当のストレスに耐

えなくてはならない。耐えられないやつはリストラ、あるいは出世コースからはずれることになり、一方、耐えられても、幸弘のようにガンになって、早死にするという結果にもなる。

男の人生は本当に痛い！のである。

末期、ホスピスのベッドに寝ている幸弘の脇の床に、妻、娘、息子の3人が布団をひいて、川のように眠っているショットは、なんとなく面白いショットだ。幸弘だけが縦（画面の上から下）に眠っていて、他の3人が、その隣に、横（画面の右から左）のポーズで眠っている。

幸弘は、住宅会社の上役でもあるし、この映画のテーマは「家族」ということなのだろう。美しい海をバックに家族に囲まれた幸弘の最後の姿が描かれる。結局、男は家族へと戻って、至福の死を迎えるのである。

#### 4. 悲劇は男の証明なり

まあ、本当に歯が浮くような綺麗事の物語。しかし、この映画のよさはそこなのである。

佐藤忠男さん曰く、「映画は自惚れ鏡」だ。悲惨な現実には世の中にたくさんあるのだから、映画見ているくらいは、夢物語にひたりたい。

おそらく、サラリーマンの多くは、この映画ほど綺麗事ではないにしても、本質的にはこれと近い人生を歩んでいる。そうでなかったら、男なんていう理不尽な役割はまっとうすることはできない。今の世の中、男が仕事に生きがいを見出すことは難しいだろう。それに稼ぐのが男の使命だと頑張って稼いでも、妻や子供に吸い取られる。部屋は子供に撮ら

れるから、家にいても居場所はない。離婚なんてことになれば、子供は普通は女性のほうにつくわけで、まして日本では子供と定期的に会うことも保障されていないため、男は送りだけさせられて、会わせてももらえないということになる。ぼくの知り合いの男性などは、「俺は、ATMか！」と怒っている。

幸弘は病死だが、他にも過労死、自殺、いずれも男のほうが女よりもはるかに危険率は高いはずだ。おそらく原因は仕事であるケースが多いのだろうが、しかし、男はどうしても男であること（社会中心であること）を捨てることができないのである。これは生物学的な議論になるが、ぼくのこれまでの経験から言うと、男は女に比べて、二つのことを同時にやっていくことができない。したがって、偉大なことを成し遂げるのも大抵は男だが、とんでもないことをしてしまうのも大抵は男である。男は一つのところにエネルギーが集中してしまうため、いったんエネルギーのチャンネルを仕事に合わせてしまい、それに熱中してしまうと、他のことが見えなくなっていくのだ。また今の世の中は、男性は女性よりも生きる選択肢が少ないということも問題にしておかなくてはならないだろう。

おそらく、この映画を見た男性観客たちは、綺麗事だとはわかっていながらも、ひと時の快感に酔うのだろう。男は痛いけど、痛みに苦しんで、そして戦死するのが男の運命なのかもしれない。これだけ綺麗に描いてもらえば、死ぬのも悪くないことのように思えてくるからである。

ぼくはというと、快感によいながらも、ぼく自身が、これとはあまりにも違った人生を

歩んでしまったため、取り返しのつかない思いがあふれてきて、つらくなった。普通の人だったら、皆、若い頃から、ある程度、この映画に近い幻想を抱くのだろう。だけど、女子に苛められ、不登校になり、スポーツができなくて、男の仲間に入れなかったぼくは、普通の男子たちができることをできないがために普通の男の人生に早くから反発を抱くようになってしまった。ぼくは、大学に入ってから、失われたときを求め続けて生きてきたように思う。これからは普通になろうと思って生きてきた。しかし、ぼくは少年時代に失ったものが大き過ぎた。いくら頑張っても亀の歩みで、なかなか他の人に追いつくことができないのである。

そのため、結婚もせず、仕事も非常勤なため、自由はもっている。しかし、これで本当に幸せなのかな？と考える時がたびたびである。

結論として思うことは、男の人生は、やはり、痛い！ということ。普通のコースをたどっても痛い！し、ぼくみたいなはみ出し者も、それはそれで痛い！痛い！のが男のアイデンティティなのだろう。

本当に男は痛い！！